

---

# チートとドローを合わせれば最強に見える！！

zerokami00

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チートとドロ―を合わせれば最強に見える！！

### 【Nコード】

N0430T

### 【作者名】

zerokami00

### 【あらすじ】

人権無視なチート神様に買われた。

男が向かわされたのはGXの世界。

そこは彼の介入により少し変化した世界だった。

『そんな世界で大丈夫か？』

「大丈夫かどうかはこっちが聞きたいわ（溜息）」

## チートオブドロ

「……?」

部屋でネットしていたら見知らぬ部屋に自分はいた。

そこは真っ白な部屋と真ん中には高級そうな椅子と画面が区切られ、それぞれ違うチャンネルが写し出される壁くらいの大きさの液晶テレビ

椅子が回転し、そこには小学生くらいの幼女が座っていた

「こんにちは……我妻圭一」

俺の名は我妻圭一なのか?なぜか名前に自信が持てない

一見するとちびっ子マッドサイエンティストな白衣と外見の少女がこちらの俺を見ている

「さらっと酷いことを考えるな、君は……?」

「んっ、何の事だ?」

「君はずぶな性格をしている……」

よく言われる。でも気にしないのが俺のルール

「……まあ、良い。本題に入ろう。今までの君の人生はどんなモ

「ノだった？」

「ナニヲイツテイルノカリカイガデキナイ

「君の今までは家に引きこもり、学校にも行かずネット、ゲーム、ネット！！と言う人生・・・君の人生は人間的に終わっている」

（ ; ）！！

「そんな俺は間違っていないはず、だって動物は本能のままに人生を終えるんじゃないのかよ！！」

「君には思考と言うものがあるだろ・・・??考えて行動するのは人間にしかできないことだ」

Orz

「そんな・・・そんなあ・・・」

「と言うわけで、私は・・・君の人生を買った。」

「はあ！？人権無視も大概にしる！！」

「何いつている？万物を創造し、社会の基盤を創ったのはこの私だぞ」

まるで神様みたいな良いぶりだな、電波少女よ

「そう・・・私は、神。万物を創った創造主」

「意味不能」

「……とにかく、君にはこれから私が選択した世界に行ってもらいたい。極力私もサポートしてやる」

少女が指差す方に扉が出現する

「私は君の言葉で言うなら、気まぐれでチートだ。そして人のプライバシーも気にしない」

「そうかよ……でえどこの世界に行かされるんだ？」

「遊戯王GX」

ヒヤッホーなかなか面白そうだな、まさか遊戯王とは神も粋なことをする

「私は何時でも君のそばにいる……助けて欲しくなったなら呼ぶが良い。」

「ああ、ありがと！神様」

俺はドアノブに手をやり、ドアを引いた。

『チートとドローが合わされば最強に見える……！』

第一話『コレクターブレード』（前書き）

連続投稿！！

今回はオリキャラ来るよ。

設定

鮫島校長の娘

一応教員

サイバー流の使い手

丸藤亮より先にサイバー流を継承している

## 第一話『コレクターブレード』

ドアを開くとそこはまたも部屋。だが今回は普通の自室のようだ

机と通帳とアタッシュ・ケース『山のように積まれている』のだが、  
なんだこれ？

1つ手に取って中をみるとそれは遊戯王カードがビッシリと詰まっ  
ていた。

「おお、神様」

『なんだ？』

普通に半透明で現れたよ、この子。

「すごいな・・・コレ」

『まあ、な。転生した者への配慮だ・・・他の神達で決められた暗  
黙のようなもの』

「ふーん・・・じゃあありがたく頂いとくよ」

その後カードの仕分けをし、いくつかのデッキを作成し今日は終えた

補足

神、邪神、三極神、地縛神は使えないので鎖とケースで厳重保管し  
た？

次の日

そとは晴れ晴れとした晴天。気持ちが良い

「おはよう〜・・・誰もいないか〜」

『おはよう』

「うにゃー!!び、びっくりした」

本当にプライバシー無視だよ。この子

『さっそくで悪が時間だ。向かってくれ』

「はあ・・・8時半で何処向かえっていうだよ。」

『今日は入学試験の日だぞ。』

「えっ・・・どこで?」

『9時から、海馬ランド。ここからだとなんて20分ああ』

／( ^ O ^ )／

「やべえじゃん、ギリギリじゃん!」

何で起こさねえ!!--とか言いたい事はあるが急がなければ必要なモ



ノは!?

デッキ、筆記用具、あとあと・・・あとなんかあったかあ!?

「くっ、なるようになれ!!」

鍵を手に取り、部屋を閉めて全速力で走る

「はあはあはあはあ・・・死ぬう!!」

運動能力なんてもともないんだよ。クソー!!

「おわあ!?!」

痛いよ。主に頭が痛い。くそ誰だ!?

「痛つてえー・・・わ、悪い」

んっ?コイツ・・・主人公じゃん!?

「遊城十代!?!」

「えっ・・・なんで俺の名前を?あんだ、どっかで会った事あったか?」

やべえとっさに口に出してしまった。マジでやべえ・・・ここは

「我妻圭一だぞ!!覚えてないのか?昔一緒に遊んだろっが!?!」

『苦し紛れすぎるな』

マジですみません。本当にすみません

「そうだったか！？悪い・・・思い出せない。」

イヤ、凹むなよ。どうせ嘘なんだから

「しかたないさ、結構昔だからな！それより十代はなんでそんなに急いでたんだ？」

わざとらしい・・・まあ性格がアレだから何とかなるだろ

「ああ！！俺はこれからデュエルアカデミアの受験なんだ！！」

「奇遇だなあ、俺もだ。んじゃ一緒に急ごうぜ！！」  
赤信号。みんなで渡れば怖くない。

一人よりも二人で遅刻だ！

「おう！！んじゃ、圭一！急ごうぜ」

主人公の優しさと馬鹿さに少し感謝した瞬間だった

『都合が良いな』

そして筆記にギリギリ間に合った俺たちは現在。実技のデュエル観  
戦中

「・・・」

レベル低い。もうちょい上手いコンボないのかよ。参考にもなりやしねえ

「すげえな！色んな奴が色んなデッキで戦ってるぞ、圭一！」

俺は初期十代はガキすぎるから好きじゃない。やっぱり三年目の方が好きだなあ

「ああ、でもあそこの奴ミス多いな」

指差す先の丸藤翔は先ほどからミスを連発している。機械族使いならもうちょい華麗に戦え

「そしてあの子もな」

さらに指差す先に女の子もまた苦戦している。

あんな子を見たことないなあ、年齢は初期早乙女レイと同じくらいに見えるが・・・  
記憶が曖昧なのかなあ

「110番 遊城十代、111番 我妻圭一！！デュエル場にあがりなさい」

「うーいしゅ・・・じゃな十代」

「ああ！後でな、圭一」

やる気あんなあ、相手はクロノスだったか。正直俺は古代系は好きじゃない、ガジェドラがマジで嫌い。  
あんなカード作るなよ

さーて俺の相手は？

「初めまして、あなたの相手は私よ。」

女！？こんなキャラいなかったぞ？どういう事だ！？

『君の介入により世界が少し変わったようだ。』

なるほど無駄に納得できるな、それ

「私は鮫島梨華。よろしく」

「よろしくお願いしやーす」

「では時間もない事だから始めようか」

俺と梨華さんがディスクを構える

「デュエル！！」

「私の先行！！ドロー！私は未来融合・フューチャーフュージョン  
-を発動！キメラティック・オーバー・ドラゴンを指定」

はっ！？サイバー流だと聞いてない！！効果はOCGだからまだよ  
かった。

「私は機械族を15体送る。そしてオーバーロード・フュージョン  
を発動。」

ヤバイヤバイヤバイ。ガチで負かしにきてるよ、この人！！

「15体のモンスターを墓地融合。現れなさい、キメラティック・オ  
ーバー・ドラゴン！！」

複数の首を持つ禍々しい大蛇のような機械竜が現れる

「このカードの効果で私のフィールドは無に帰る。そして私はカードを二枚セットしエンド」

攻撃力

12000

「ふざけんな！！気合い入れすぎだろうが！！」

観戦しているモノもさすがに無理があるだろう、と言う感じ

「えっ、ああ！すまない。本気で行けとクロノス教諭から言われたのでね、運が悪かったと思ってくれ」

「まったく・・・俺じゃなきゃ余裕で負けてるよ。コレ」  
はっ？、会場の観戦者と梨華は思った

「俺のターン！ドローし、光の援軍発動！」

三枚落とし、デッキからライトロード・パラディン・ジェインを手札に加える

「さらにもう一枚」

もう一度同じことをする

そして自分のデッキを

名推理やモンスターゲートでデッキを掘り

手札抹殺や手札断札や光帝クライスで自身とDDRを破壊しドロ

し神剣・フェニックス・ブレード・で除外し回収し魔法再生または

魔法石の採掘、アームズ・ホール等でドロカードを回収で引きま

くり、効果で捨てるを繰り返すこと三分

デッキ残数1

墓地26

除外8

手札5

「ふふ、俺は墓地の戦士を2体除外し神剣を回収。してとDDRを発動。コスト神剣」

墓地に送られたカードと引き換えに異次元から土人形のようなモンスターが現れる

「来な、ジャンク・コレクター！俺は手札をすべて伏せ、効果発動」  
墓地24内一枚以外魔法

「やっと来るか！！私のオーバーを倒しに」

「いや・・・勝てないモノには向かない主義でね」

「じゃあ何の効果、またドロー効果なのか？」

否、ドローではない。俺はアンタに次のターンをやる義理はない

「コイツは俺の墓地の罠カードと一緒に除外し、効果を使用することが出来る！！マジカル・エクスプロージョン」

墓地マジック一枚につき×200

空から複数の魔術攻撃が梨華のもとに降り注ぐ

l i f e 0

「きゃあああああ!!」

「さよなら、楽しかったよ。それなりに・・・」

1ターンk i e e だな、カッコいいだろ？

批判する声が多い、なぜだ!?

梨華さんに謝れなどの声も聞こえた。

えっ、ダメなの？

そんな感じで逃げるようにフィールド場をそそくさと去る俺

「おおーい! 圭ー!!」

「勝ったか?」

「おう! お前はとうだったんだ?」

「余裕だ。帰りにどつか寄って行こう」

「おう、良いな」

二人はその日。打ち解けた、主に嘘の信頼関係だ。

『最悪のデツキだな・・・まったく』

「しかたないじゃん。手に取ったのがあのコレクターブレードなんだから、でもカッコよかったはずなのになぜ批判された・・・」

『この世界ではデツキ破壊やロックバーン、フルバーンには批判的

なんだ。』

なんと！？知らなかった。そうか、なら次からは殴り殴られ勝つデ  
ツキを作るか

『それが良いと思うぞ。』  
『というわけで作ってみた』

『はやくないか！？』

「頑張りましたあ（；^|^A）」  
とにかくデツキを作り、明日はデュエルアカデミアに向かうため遅  
刻しないように早く寝る



## 第一話『コレクターブレード』（後書き）

1k1111とか最悪〜!!  
です。

ワンサイドゲームとか乙

でもムカつく相手には使っても良いと思う作者です。

正直、梨華にも防がせたかったがそれだと圭一の負けフラグしか立たないので

長引かない決闘でした。

すまんorz

今度は入学式です。次回もオリキャラだすよ

第二話『かみみみた 前編』(前書き)

オリキャラでるよ

ヒロインだ

かみみみた属性があります

圭一にベタ惚れだよ

## 第二話『かみまみた 前編』

そして翌日

圭 side

俺たちは船に乗り、デュエルアカデミアに向かっている。

「なあ、圭。」

「なんだ？」

「みんなお前を見て睨んでるぞ。なんでだ？」

昨日のことを十代に話してやる。

「フルバーンで先生を一撃ノックアウトか、そりゃ仕方ないさ。みんなそういうデッキよりもバトルするデッキの方が好きだし、なんたって燃えるからな!!」

単純・・・カードゲームは戦略だ。フルバーンやロックバーン、デッキ破壊の何が悪い。チームユニコーンに謝れ

「というわけで新しいデッキを作ってみた。」

「おお！みせてくれ」

「今度な」

デッキケースにしまうとまた空を眺める。

「ちえ・・・おお！んじゃ、今デュエルしないか!？」

ディスクを見せる十代。このデッキで戦うのも悪くないか

「んや、やめとく」

「なんでだよ」

触らぬチートに敗北なし。俺は遊城十代及び主人公側の者達には勝てる気がしない

『そんなことはない。君にもチート能力はある。』

「マジで!??」

「んっ、どうした?」

やべえ！何時も通りで話かけちまった

「な、なんでも無い!!あつはは！潮風チョーキモチイ!!」

『あとで話してやる、それより着くぞ』

「おお！すげえ!!見てみるよ、圭一!!」

十代の指差す方には大きな島とその上に立つ人工建造物のデュエルアカデミアが目に入った。

?side

「来たね・・・デュエルアカデミア。はぁ・・・話かけたいなぁ・・・でも・・・怖いなぁ」

私は彼の後方で同じ光景を見ながら彼の背中を眺める

「頑張る・・・頑張るんだよ・・・私」

彼が行ってしまう前に彼に挨拶がしたい。

「あ、あの・・・」

彼の肩に触れる。心音は止まることを知らず、激しい

「んっ、なに？」

「わ、わわわ私！！神里鈴花と言いましゅ！！！」

噛んだ。盛大に噛んだ。恥ずかしさで死にそうな私を彼は見ている

「落ち着いて」

「は、はい！！スー、ハー、スー、ハー・・・き、昨日の決闘見ました！！とっつってもカツコ良かったです！！我妻さん」

「えっ、あ！ありがとう！嬉しいな」

「そ、それで是非！！おおお友達になってデツキを見て欲しいなぁ！！なあって・・・嫌ですか？」

前が最優先事項。後ろがたてまえ

「嫌なわけない。君みたいな子が友達になってくれて嬉しいし、俺で良ければアドバイスできるならしよう。」

「じ、じゃあ！メールアドレス・・・交換していただけますか！」

「よろこんで」

彼は携帯で私にメールアドレスを送ってくれた。嬉しくて倒れてしまいそうです。

「あ、ありがとうございます！じゃあ、あとで寮分けが終わったら、すぐに速攻で行きますから！」

そういつて彼の前から足早に去る。彼の顔を見ているだけで倒れてしまいそうだ

圭 side

『ああ言う子が好きなのか、君は』

「なんだ。神様が妬いてんのか？」

『?・・・』

頭にヤシのみが直撃する。死ぬほど堅いぞ

『神罰的中。』

マジで怒ったよ。この人・・・十代だって天上院に似たような事言っただわ！！

『こんなんですんだのなら奇跡だ。本当ならこのあと地獄に蹴り落としてやる』

目がマジだった。マジで怖い

『本当のところ、なぜ彼女の申し出を受け入れたんだ？』

「あんな原作キャラはいなかったと思って名前を聞いたら案の定だし、面白そうじゃないか・・・興味がわいた」

『悪い方の興味だな。まったく君と言う奴は・・・』

ふふん。たしか神里鈴花か、昨日丸藤翔と同じ時に試験でプレイミスしてた子だ・・・面白そう

「おおーい！圭一行くぞー！！」

遠く先から十代の声が聞こえる。待ってくれよ！！

その後、鮫島校長先生の有り難いお話と新任の教師で鮫島校長の娘である鮫島梨華さんの紹介、現在する教師の紹介。そして寮分け

「圭一君！！」

途中鮫島先生（娘）に呼ばれた俺は職員室に来ていた

「なんですか？」

「君の成績と新任とは言え教師である私を倒せるほど実力は認めて

あげたい・・・だが、すまない!!」

説明+謝罪。何たいしての謝罪なんだ？

「君をレッド寮にしまして、本当にすまない」

「ああ、お気になさらず、気にしてませんから」

正直試験で勝てば言いんだろ。気楽に行こうぜ

「本当か・・・？いや、でもすまない。私もできるだけサポートする!!君のデッキ構築やタクティクス、コンボ、すべてに光るモノを感じる!!君は私が立派なデュエリストにしてみせるから!!」

まさか泣きつかれるとは、子供か!?感動したのはわかったが、熱血教師だなあ

「圭一、なんだったんだ？」

「ああ、梨華先生に泣きつかれただけだ。気にするな」

「意味わからないぞ?・・・それより紹介する、こっちが丸藤翔。こっちは我妻圭一だ」

十代の後ろから青髪の少年こと丸藤翔が顔出す

「簡潔すぎないか？」

「よ、よろしく・・・我妻君」

「どうも、我妻でなくて圭一で良いぞ」



「あつ、うん。圭一君」

そして三人でレッド寮に向かう

ボロいが別に不便はなさそうだな

俺はどうやら部屋に一人らしいし、とても快適快適

「圭一！」

ドアの向こうから十代の声が聞こえ、ドアを開けてやった

「なんだ？」

「これから俺たちと一緒にアカデミアを探検しようぜ！！」

このあと神里が来るからここにいなくては

「うーん・・・ちょい用事があるから先探検してる。終わったら連絡する」

「そうか、んじゃ翔行こうぜ！！」

「じゃ、またあとでね圭一君」

そう言って部屋の前から足早に去る二人を見て、ドアを閉めメールを送りカード整理

「神里鈴花が来るまで暇だから、是非能力について聞きたい」

『そうだな・・・君に宿るのは、自分の幸運を操る能力。君が未来に起こる幾多の幸運を君の力で先にしようする事ができる。例える



アタフタしてるなあ、こつ言う子は結構好きだったりする

と、誰だ。後ろのパツキンの女って天上院？なぜ、神里と一緒にいる

「こんにちわ。私は天上院明日香、鈴花の友達よ。よろしくね」

「ああ、俺は」

「鈴花から君の話は昨日から嫌と言つほど聞かされてるわ。我妻圭一君でしょ」

「ああああ明日香ちゃん!!!!」

顔がレッドゾーンだぞ。それにまた噛んだし

「鈴花をよろしくね」

「あ、ああ・・・」

別にそんな関係ではけしてないだがなあ

「そ、それでえ・・・デッキ!!!見てください!!!」

差し出したデッキを一通り拝見。スフィアデッキか・・・面白いな

「鈴花の構築どう?」

「普通だ。」

「普通・・・ですか・・・」

なんかションボリさせてしまったな。

「だが悪くない・・・スフィアデッキなら」

鎖付きブーメラン、エネミーコントローラー、トーチ・ゴーレムとかエアトスなんかも入れれる。

あとは強制終了とか

ダブル・サイクロンとか

「こんな感じかな」

今上げた全種三枚づつを渡す

「へえー、トーチ・ゴーレムとか強制終了とかダブルなサイクロンとか初めてみたわ」

「そ、そうですねー！我妻さんの選んでくれたモノですから是非とも全部デッキに入れさせていただきますー！！」

喜んでるようだなにより。

「んっ」

電子学生手帳がなったのに反応して取り出す

「どうした、丸藤？」

「圭一君！兄貴が賭け決闘始めちゃったんス！？早く来て止めるの

手伝って!!」

混乱してるな、賭けとはまた楽しそうなことしてんじゃん

「賭け決闘ですって?学校側にバレたら問題になるわよ!!」

ちやっかり聞いてやがったな

「ヤバイなあ、んじゃ止めに行くか・・・どこにいる?」

「アカデミアの近くの森ス!!」

「了解」

ディスクを持ち、なんか二人が着いて来たのが気にせず急いで向かう

十代 side

「死者蘇生を発動!!」

これで墓地からフレイム・ウィングマンを選択して俺の勝ちだ!!

「俺はフレイム・ウィングマンを墓地から蘇生する!!」

万上目が笑いだす、その理由を理解している者は他にいない

「バカが!!フレイム・ウィングマンは融合以外では特殊召喚はできん!!」

「なっ、そんなあ!!」

「テキストもろくに読めないんとは、これだからドロップアウトボ  
ーイは!!!」

「くっ、なら俺は墓地からフェーザーマンを守備で特殊召喚!!!」

「すでに貴様の敗北は確定している!!!メフィストは貫通効果を持  
つ、貴様のフェーザーマンを切り裂け!!!」

地獄將軍・メフィストが大斧を振りかぶり、フェーザーマンを叩き切  
り裂いた。

「フェーザーマン!!!」

「貫通ダメージを受ける!!!」

l i f e 0

「ぐっ、うわあああ!!!」

「兄貴!?!」

万上目はフレイム・ウィングマンをデッキケースに入れる

「やはりクロノス教諭に実技で勝ったのはマグレか・・・約束通り、  
カードは貰っていくぞ。」

「おい、デュエルしろよ」

圭一が俺の前に立ち、万上目に言い放つ。

圭 side

「仲良しごっこのつもりか・・・いいだろう！貴様もオシリスレックでありながら教師に勝つ実力・・・どうせまぐれだろうが、この俺が見定めてやろう！！構えろ、我妻圭」

「ああ、もちろんアンティだよな？」

俺はデッキケースからカードを出す。

「俺が負けたら真紅眼の黒竜をやる」

「何!？」

驚くだろう。超のつくレアカードだぜ

「あなた!!そんなに高価なカード賭けてもし負けでもしたら!!」

「こんなカードより友人の大切なカードの方が大事なんだよ」

「我妻さん!!!カカカツコ良すぎます!」

部屋にあと初期絵のが三枚ほどあるしな、とは口が裂けても言えん

『それを考えなければカツコいいんだがな・・・』

「俺はお前にフレーム・ウイングマンを賭けてもらおう!!」

「ふん・・・良いだろう。後悔するなよ!!」

「デュエル!!」

良い手札だ。だがそう入れ替える

life4000

「俺のターン！！モンスターをセットしカードを三枚セット！！」

life4000

「俺のターン！！地獄戦士を攻撃表示で召喚し、攻撃！！ヘル・ア  
タック」

「残念・・・メタモルポット」

「何！？」

「効果は知ってるよな」

「くっ！！」

お互いの手札を捨て同じ五枚ドロ

「・・・くっ、ははははは！！どうやら貴様には俺のエースを紹介  
できるようだ！墓地に闇が三体！！」

俺の前に黒く巨大な竜が現れた。

「・・・まさか、なんでだ？」

『君のせいだろ？どう考えても』

「現れる！ダーク・アームドラゴン！！効果発動！墓地に存在す  
る闇属性カード除外しフィールドのカードを破壊する。ダーク・デ



ストロイ」

「ぐっ！」

伏せが1枚消し飛び、万上目はカード伏せターン終了を宣言。

「ドローー！！俺はジェムナイト・ガネットを召喚！」

燃える宝石の戦士が現れ、ダーク・アームドラゴンの前に立つ

「初めてみるカード郡ね。鈴花は知ってたの？」

「いえ、我妻さんのデッキは実技の時に使っていたフルバーンだと思っただんですが、でも一撃必殺の圭一さんもカッコいいですけど宝石の戦士を使う圭一さんも美しいしカッコいいです！！」

「ガネットの攻撃。」

！？という感じで皆が反応する攻撃力1900に対し相手は2800の高アタッカー  
差は歴然なんだよな

「何を言っているの、攻撃力の差は歴然なのに！！あり得ないわ！！」

「きつと何か考えがあるんですよ、明日香さん！！」

ダーク・アームドの眼前へ飛び上がり炎を纏う左腕で殴りかかる

「貴様のモンスターの攻撃力の方が下なんだぜ！格の違いを見せてやれ！！ダーク・パニッシャー！！」

「手札からジエム・マーチエトの効果発動。このカードを捨て、ガネット攻撃力を1000上昇する!!!」

左腕の炎が燃え上がり、闇の攻撃を弾き返し、ダークアームドを燃やす

「ダムド撃破・・・」

第二話『噛みました 後編』(前書き)

漫画キャラがでるよ。

あと主人公が等々ジエムナイトを使うよ！

最初はガネットから

## 第二話『噛みました 後編』

「くっ……」

「ターンエンド」

モンスター数は同じか……さてレインボーダークはさすがにないよな

「俺のターン！！ドロー……どうやら貴様は俺様に負ける運命しか残されていないようだ！俺は地獄戦士をリリースし地獄將軍・メフィストを召喚！さらに墓地に闇が二体以上存在するとき墓地のモンスター2体を除外し」

闇に染まりし不死鳥が俺の前に姿を表し、燃え去る

「ダーク・ネフエティスを墓地に埋葬する！！そして伏せカードをオープン！リビングデットの呼び声を発動！！」

墓地から地獄戦士を蘇生

「地獄戦士が特殊召喚された時に俺は地獄の暴走召喚を発動！！自分のモンスターが特殊召喚された時、俺はそのモンスターを可能な限り特殊召喚し相手は自分のフィールドのモンスターを選択し特殊召喚させてやる」

「なら俺はデッキから残りのガネットを2体、フィールドに並べる！！」

「装備魔法発動！ヘル・アライアンスを地獄戦士一体に装備。攻撃力2800に上昇し、ライトニング・ボルテックスを発動」

雷撃がガネット立ちに降りそそぎ、すべて破壊した

「貴様のモンスターは消し炭だ！」

「くっ、強いなあ・・・」

『どうやら、君に対してこの世界の抑止力が彼に力を与えているようだ。このままでは負けてしまうよ』

「我妻さん！！！」

「戦況は絶望的ね・・・」

相手には1200のモンスター2体に2800と1800が一体づつ

「全モンスターで攻撃！！！」

「伏せカードを発動！！強制終了！俺はもう一枚の伏せカードを墓地に送りバトルフェイズを終了させる」

「ちっ、命拾いしたな」

万上目がエンド宣言し、危ない状況は続く。そして疑問に思ったことが1つ

「・・・勝てるのか」

『今の君は少々無理があるな、幸運を使つか？』

「……えっ、マジで」

『嫌なのか？』

「……」

万上目に勝った顔されるのムカつくから違う意味で嫌だ

『ではイメージしろ。自身が彼に勝つイメージを強く抱け……』

「……」

場の流れが変わる。

それを感じたのは対峙した彼である。そしてまわりのギャラリイもそれを感じとる

「ドロー……」

来たか……

キーカードは闇の量産工場

「……俺は手札から闇の量産工場を発動」

2体のモンスターを墓地から回収

「さらに墓地の魔法カードを発動！！ジェムナイトを除外し、墓地からジェムナイト・フュージョンを回収！！そして手札のジェムナイト・ガネット2体を融合！！」

「自己回収能力を持つ魔法カード・・・」

2体の宝石戦士が現れ、二人が輝きが増す。

「現れる！！ジェムナイト・ルビーズ！！」

ガネットよりも鮮やかな赤色のマントを纏う宝石戦士が現れた

「俺は手札からDDRを発動！手札を一枚を捨て、除外ゾーンから現れる、ガネット」

燃える左腕を纏うガネットがルビーズの横に立つ

「2体のモンスターでは俺には勝てん！！」

「・・・ルビーズの効果発動！！パワー・ゲイン！！ガネットをリリースしルビーズに攻撃力を加算する事ができる！！」

2500 + 1900 = ATK 4400

「攻撃力4400！？だが次のターンにダーク・ネフエティスが舞い戻り、貴様のフィールドの強制終了を破壊する！そして貴様は俺に負ける」

「墓地の岩石モンスターを五体を除外し！！俺の切り札、メガロツク・ドラゴンを特殊召喚」

岩石で体を覆う竜が咆哮を轟かせ、出現する。

ATK3500

「攻撃力が3000以上のモンスターが2体だと!？」

「バトル!メガロック・ドラゴンでヘルアランスを装備しない地獄戦士に攻撃!ロック・ブラスト!！」

life1600

地獄戦士がメガロックの突進により破壊される

「くっ!!!だが地獄戦士のダメージはお前も受ける!んだぜ!」

life1600

「必要経費だ(三沢風)。そしてルビーズで地獄將軍・メフィストに攻撃!!ルビー・シューティング」

ルビーが持つ杖から炎術を放ち、メフィストを焼き尽くす

life0

「そ、そんな!?!うわあああああ!！」

万上目。ドンマイ!!

「お前がツイてないんじゃない。俺がツイてんだぜ?」

万上目が膝をつく。結構強かったなあ

「流石は圭一さん!!カッコいいです!!」

「さ、約束だ。返せよ、フレイム・ウィングマンのカード」



「くそっ！！覚えてろよ」

背景以下の扱いの取り巻きを連れ、雑魚キャラの捨て台詞を吐き逃げ帰って行くその姿は実に滑稽

side 十代

「ほらよ。十代」

そういつて圭一は差し出すフレーム・ウィングマンを俺に渡す

「ありがとな、圭一」

「べ、別にお前のために戦ったんじゃないだからな！！」

主人公にツンデレ属性が追加されました

「わ、我妻さん！！それはダメですよ！！絶対ダメですからね！？」

「冗談だ。」

他の者はこの台詞の意味を理解していないが、鈴花は理解していたらしい。悔りがたし

「なあ、圭一・・・俺は弱いか？」

十代はフレームウィングマンを手にしながら考えている。そうとう今回は重症だな

「まあ、な・・・」

「そうか・・・」

「だが必ず強くなる。俺たちはなんのためにこの学園にいる?」

「えっ、ああ、そうだな・・・」

圭 side

この落ち込みよう・・・アレをやるか・・・正直十代無双になるのは避けたかったが、仕方ないか

「十代・・・あとで俺の部屋まで来い。渡すモノがある」

「なっ!?ズルいです!セコいです!羨ましいです!遊城さん!!」

鈴花は置いていて

さあ、て終わったし学生寮に戻るか

「そろそろ歓迎会が始まるわよ、鈴花」

「えっ!ちょ!?!明日香さん!!殺生ですよ!!」

鈴花を引きずりながら、明日香はブルー寮へ向かう。鈴花は最後まで圭一の方を見ていた。

「俺たちも行くか」

「そうスね、十代の兄貴」 「ああ」

歓迎会はまあ、寮のレベルと比例されている。

「初めまして、みなさん。私がレッド寮の寮長の大徳寺だにゃ!アカデミアでは歴史関連で錬金術についても教えている。どうぞよろ

しく」

寮はボロいが飯が食えるなら文句はいわない

十代は上の空で食事中もボーッとしていた

飯を終え、俺たちは部屋へ戻ったのであった。

「漫画十代のカードは……あつたあつた……M・heroと属性融合型のE・hero……あとV・hero」

『止めておけ』

「止めるなるなよ。今回は俺の責任でもあるんだから」

『彼にそのカードたちを渡すことは私は反対する。』

「頼む……このままじゃ大切なイベントの時に負けちまうだろ？」

『……勝手にするが良い。』

神様はそっぽを向き、そのまま会話は強制終了

その時部屋のドアを叩く音。恐らく十代

「入れよ」

「……ああ、俺に渡したい物ってなんだ？」

「お前に新しいheroをやる」

「えっ？」

「その代わりにお前にはこれらを持つ責任を持ってもらう……」  
そういつて十代にケースに入るhero達を見せる

「E・heroにはまだこんなに種類があつたんだな……それにM・heroに、V・hero……どれもカッコいいな!!」  
よかつたテンションが戻ってくれて

「お前には今後このカード達を使用することができる。その代わりに他言無用、入手した経路も伏せてくれ」

十代はそれを聞きながらも目を輝かせている。

「お前がこの世界で負けることなどあつてはならないんだから」

「なんか言つたか？」

「いや……」

「それよりもデッキ作ろうぜ!こんだけあれば今度は万上目にも負けない最強のデッキができる!」

その後深夜まで付き合わされ、次の日。頭痛が酷いなか、昼の購買は完売で何も買えず

「不運……だ……」

『昨日の幸運のつけだな……ふっ、良い気味だ』

「うう……ご飯が食べたい!!」

「!!なっ、何よ。びっくりさせないでよね……」

そこには明日香にも負けなくらいの黒髪の美しい女性がお弁当を食べていた

「すみません……うう……」

「……貴方、大丈夫?」

「hungry……死にそう」

「……ホラ、食べなさい。」

サンドイッチを分けてくれた女性に少し惚れたのは生まれて初めてだ

「ありがとうございます……美味しい」

「それはまあ、私が作ってるだから当たり前でしょう」

性格はどうやら悪いらしいな、自分を過大評価するタイプか……だがマジで惚れたかも、名前聞いとこ

「……名前を聞いても良いですか?」

「小日向星華よ……よく覚えておきなさい。このアカデミアで一番美しいデュエリストよ」

「わかりました。恵んでくださってありがとうございます。小日向さ

ん

「もう私の近くで餓死寸前にならないようにね、我妻 圭一」

星華さんが笑う。顔は可愛いのに性格がちよつとな・・・

「なんで俺の名前を？」

「貴方が有名人だからよ。あの万上目準に勝つデュエリストだもの」

噂かなんか・・・まあ、良いや美しい女性も見れてお腹が膨れれば  
万々歳だ

小日向星華と別れ、次の体育の授業へと向かった

サンドイッチ1つじゃもたねえよ

第二話『噛みました 後編』（後書き）

小日向星華さんは私大好きなので

主人公と仲良くさせていただきました！

漫画版を知っている方はわかると思いますが彼女が使う蛇デッキは  
変更してレプティレスにしようと思います

ではまた次回でノシ

第三話『速攻魔法発動!』（前書き）

今後はディケイド的（初期の敵キャラが出てくる）展開をするか  
もしれない

また遊星たちの敵キャラも出すつもり

やっぱり満足さんとは戦わなきゃ

苦手な方は見ない方がいいかも



### 第三話 『速攻魔法発動!』

「うわぁ〜!!授業始まつてる〜!!」

急いでロッカールームに走ってくる翔

「何急いでるんだ、翔?」

「なんでそんなに圭一君は落ち着いてるの?授業だよ、授業!」

「hungryでなんもやる気起きないからサボりだよ」

「あはは、余裕だね」

翔がロッカーを開け十代が間違えて入れた靴を入れ換える

「おい、翔なんか落としたぞ?」

下に落ちた封筒を拾い、確認

「ら、らぶらぶらぶ・・・ラブレターだと!!」

「えっ、えええー!」

「んっ・・・そういえばこんなイベントがあったようなく気がする  
ノーね」

「な、何いつてるんだよお!!それよ返してよ、圭一君!」

確かクロノスの偽造手紙のヤツだったな、翔が捕まるヤツ。どうし

よう

「翔……言つとくがこれは十代宛だぞ？」

「えっ？」

「遊城十代様へと書いてある。差出人は……おー！イッア、ファンタステイク！」

天上院とか、生徒のなかで一番自分が評価してるヤツを使うなんて、酷いヤツだな

「と、とにかく兄貴に渡した方が良いよ、圭一君！！」

ここで渡すのはシナリオ的には問題ないが、せつかくなので一応本人に聞きに行くか

「ちょっと出てくるわ。あとでな翔」

「えっ、ちょ、圭一くん！！」

（女子寮前）

「およびですか！我妻さくん！！」

なぜ鈴花を呼んだかと言うと、女子でメアドはコイツしか知らないから

「すまん、天上院を呼んできてもらえないか？」

「・・・」

「なんだ、その反応は？」

「私じゃダメですか？」

「今回は天上院に用事だ。あとでかまっつてやるから、さっさと連れて来い」

「わかりましたよお！！」

トテトテと歩いていく。ロリツ子どんまい

「何かしら我妻君？鈴花がものスゴく不機嫌だったんだけど」

「気にするな、それよりお前にこれを渡したくてな」

「えっ？ああ、ええ！？」

疑問みたいな顔と照れた顔みたいな感じが入り交じっている

「読んでくれるか？」

「こ、困るわよ！！本当に、う！嬉しいけど・・・それにこんなのが貰ったのも初めてで、少し考えさせてくれるかしら？鈴花のこともあるし？」

「何を考える必要がある？ささっとしてくれ」

「えっ、そそそんな！！強引すぎるわよ！！そういうのはもう少し順序をふんでからするものであって」

「いいからさっさとしろ！」

「わ、わかったわよ！！勘違いしないでよ？誰にでもするわけじゃないんだからね」

頬に唇が触れる。えっ？ええ！？意味不明！？だぞ

『おお・・・なんか見てるこっちが恥ずかしいな』

「な！！お前なにすんだよ！？」

「何って・・・こう言うことじゃないの！？」

「ち、違うわあ！！その手紙を速急に見ろ！！それでこの会話が理解できるはずだ」

「・・・ええー！！！」

「それをお前に見て真偽をして欲しかっただけだ」

「ごめんなさい・・・少し自己嫌悪だわ。それは偽物よ、私はそんな汚い字は書かないわ」

そうか、まあ犯人はわかってるから懲らしめに行くか

「そうか、ありがとな。まあ・・・アレもなんかありがと」

顔を赤くして恨みったらしくコチラを見ていたのでさっさと退散

「ちょっと待ちなさい!！」

「なんだよ」

「犯人を捕まえるならあえてこれに乗りましょ・・・犯人を誘き出して貴方が捕まえてちょうだい?」

いや、犯人は明白だから。クロノス以外にやる奴なんて万上目くらいしかないし

「ええー」

「良いわね?」

「・・・」

「良いわね!?!」

「は、はい!」

最後だけなんか物凄く殺意を感じたのは秘密だ

女子寮湖側裏口

「あのヤロー・・・風呂の前で待たせるたぁいい度胸じゃねえか」

どうやら中には誰もいないようだが、一見すると俺はただの変態でしかない

「それにしても梨華さんまでなぜいるんですか？」

梨華さんは何時もの教員制服を纏い、俺の横で正拳突き二回、回し蹴り一回づつの練習をしている

「なんでも教員の中に職権乱用で好き放題するやからがいるから懲らしめるために私の力を借りたいと聞いたのですね？」

「ちなみに」

「空手黒帯、柔道黒だ。父が体も鍛えろと言っただけでな」

あのおっさん。自分の娘を殺傷能力上げて何させたいんだか・・・

そんな時柵につけられた鍵が何かで切断され、鉄の柵のドアが開く

「来たぞ・・・」

クロノス教諭、ご愁傷さまです。

「はあああああ！！」

梨華さんの鬨気の籠る声が聞こえる。

相手が湖の方に梨華さんの蹴りでブツ飛ばされ、クロノス？は沈む

「呆気ないな・・・」

シジジ

「なんだ今の音？」

ジジジージジ

「音？何も聞こえないが……」

『気を付ける、圭一』

「どついつ意味だ？」

ザーザーザーザーザーザーザーザーザーザー  
ザーザーザーザーザー

「うわぁ、うるさいー!!」

咄嗟に耳を塞ぐ。まるでテレビの砂嵐が世界におこっているような感覚である

『……』

梨華の姿が消え、さっきまで女子寮裏口の背景は消え、目の前は発展した街へと変わった

音もすでに消え、人なんて誰もいない街で俺と神様は立っている

「おいおい、俺の相手はアンタかい？」

目の前に虫を象徴とする服を纏うまさに、この虫野郎!!が立っていた。

「わけのわからん奴に話かけられたと思ったらコレだよ」

「なんでこんなところに虫野郎が？」

「虫野郎とは失敬だな！！お前！！」

「速攻魔法発動！！バーサーカーソウル！！」

「うわああああ！！や、やめろ！あれを思い出させるな！」

あれとは魔導戦士の連続攻撃だろう。よほどトラウマのようだ。と言うことは本物か？

「それよりアンタ。デュエリストだろ？」

虫野郎が指差す、人に指差すなて教わらなかったか？

「ああ、まあな」

「この後に出会うデュエリストと戦えと言われてるんでね。」

ディスクを構える。仕方ない、当事者はコイツの相手をしなければこの空間から出してくれそうにないし

「いいだろう。」

『気を付ける、何か強い力を感じる』

「強い力？」



「・・・」

確かに、なんか邪悪なるオーラを放っているように見えなくもない。厨二か？

「デュエル」

Life4000

「俺の先行！！ドロー・・・代打バッターを召喚！！さらに手札から魔法発動！！孵化！！代打バッターをリリースしレベルが1つ高いモンスターをデッキから特殊召喚！！」

「現れる！アルテメット・インセクトLv5！！さらに代打バッターの効果発動！手札から昆虫族モンスターを特殊召喚！来い、デスサイズ・キラー！！」

虫野郎の前に巨大な異形の虫が現れ、さらにキモい蟻螂が現れる

「むひよひよひよ！！どうだ！！俺の布陣は！？」

「うわああああ！！キモい！キモい！」

『なんだ君。虫が嫌いなのか？』

「当たり前だ！！虫はうざい！！蟻螂なんでキモいだけだ。蝶はギリギリ許せるけど」

「お前！！虫をバカにしてんのか！？？」

「キモい〜！！抹殺してやる！！」

「ぐぬぬ！俺は無視加護を発動！！このカードは墓地の昆虫族を除外することで1体の攻撃宣言を無効にする。俺はターンエンドだ！！」

Life 4000

「俺のターン。ドロ〜！！手札からジェムナイト・フュージョンを発動！！ガネットとジェムナイトサファイアを融合！！赤く燃える宝石の力！！ジェムナイト・ルビーズを融合召喚！！」

燃える宝石の力を持つルビーズが虫たちの前に現れる

どうせ止められるなら攻撃するか

「さらにジェムレシスを守備で召喚！デッキからジェムナイトを手札に加える」

「ジェムナイトだと・・・聞いたことないなあ」

「攻撃！！燃やセルビーシューティグン！！」

ルビーズが杖をデスサイズ・キラーに向ける

「無視加護発動！！墓地の代打バッターを除外し、攻撃を無効だ！！」

電磁バリアのようなモノでルビーズの攻撃が止められる

予想通りか、問題は次のターンのアルテメット・インセクト1V7

だが

「二枚セットしエンド」

手札は一枚だが仕方ない。

life4000

「俺のターン！ドロ後・・・キタキタキタ！！lv5はlv7へと進化を遂げる！究極のインセクト！！アルテメット・インセクトlv7を進化召喚するんだぜえ」

化物が成長し化物羽虫へと姿を変える

「究極の虫様の効果！！フィールドの相手モンスターの攻守を700ダウン」

化物羽虫が鱗粉を撒き散らす、俺のモンスターが弱体化する

ルビーズATK2500 1800

ジェムレシスDEF500 0

「さらに！！墓地のlv5を除外し、ジャイアントワーム特殊し！！アリの増殖を発動アリ！！」

ワームがリリースされて2体アリトークンが出現する

「2体をリリース！！おいでませ、女王様あ！！」

そこには出現したのはデメリットアタッカーで名高いインセクト女王

「インセクト女王召喚！！」

「うわあ〜でたよ。上級で生け贄攻撃とかww」

「・・・デスサイズ・キラールとアルテメット・インセクトで攻撃！  
！」

デスサイズ・キラールが鎌を振りかぶりジェムレシスを破壊する

life4000

「くっ」

「アルテメット・インセクトの攻撃！！ポイズン・バースト」

アルテメットインセクトが毒の鱗粉を放ち、ルビーズが倒れる

life3200

「すまない、ルビーズ」

同時刻

シナリオは我妻がいた時から少したち、原作と近い動きをしている  
主人公たち

明日香の手紙を見た翔がそれを十代に伝え、翔に半場無理やり連れ  
てこられていた

「女子寮に無断で侵入するなんて良い度胸ね」

「あ、明日香さん！！さあ、兄貴どうぞ！！」

「おい、翔。流石に嘘くさいからな・・・まったく圭一も帰ってこ  
ないし、どこ行ったんだか」

「ラブレターの件なら我妻から聞いてるわ。私じゃないわ。あれは偽物よ」

「ほらな、本人がこう言ってるんだぜ？」

十代は苦笑いで翔を見る。翔は驚いた表情で申し訳なさそうな顔をしている

「というわけで帰るわあ、悪いな」

「待ちなさい・・・ラブレターの件は終わったけど、女子寮の無断侵入には目を瞑れないわねえ・・・もしかしたら退学になるかも」

明日香が何を思ったか、そんな事を言い十代を引き留める

「ねえ、遊城十代。デュエルしない？」

「何？」

「私が勝ったら侵入は見逃してあげる。私が負けたら大人しく先生たちにつきだされなさい」

「ええー!!」

「良いぜえ!!売られた決闘は買う!!」

「ちよ、兄貴!？」

お互いがディスクを構え、我妻のカードで強化された十代のデッキ

「デュエル!!」

「俺の先行ドロ―!!手札からE・heroフォレストマンを守備で召喚」

森を象徴するようなheroが現れ、十代の前に構える

「さらにカードを一枚伏せて、エンドだ!」

「私のターン!ドロ―!切り込み隊長を召喚!効果で隊長をもう1体召喚。さあ、これで貴方は私のモンスターを傷つけることはできなくなつた。カード二枚伏せエンド」

「俺のターン!ドロ―!この瞬間!フォレストマンの効果発動!このスタンバイフェイズにデッキか墓地から融合を手札に一枚加える!!」

デッキから融合のカードを見せ手札に加える

「そして融合!!手札のE・hero バブルマンとフェザーマンを墓地に送り!!現れる!俺と我妻の絆のカードの一枚」

湖から現れるのはマントを羽織る氷結のhero

「E・hero アブソリュートzeroを召喚!!大盤振る舞いだ!!速攻魔法!マスク・チェンジを発動」

切り込み隊長達が氷結し砕け散る

「何よ！そのカードは!？」

「違う、これはアブソリュートzeroの効果だ！このカードが場を離れる時に全体除去が発動する！マスク・チェンジはこのカードの効果でリリースした属性と同じ融合heroを召喚する」

湖の中からアブソリュートzeroの場所に新たなheroが現れる

「来い!!M・hero ヴェイパー」

「M・hero・・・？」

「ヴェイパーで攻撃!!フリーアティックエクスプロージョン」

水を操り、明日香にダイレクトアタックを決めた十代

「よし！ターンエンドだ!!」

life1600

「くっ・・・私のターン!ドロー!コールドエンチェンターを守備で召喚し、カードセットしエンド」

life4000

「俺のターン、ドロー!!ヒートハートをヴェイパーに発動し、貫通攻撃を与え攻撃力を500上げる!バトル!!ヴェイパーの攻撃」

「畏カード発動!ドレイン・シールド!!」

コールドエンチェンターの前に楯が出現し、攻撃が吸収される

life4500

「Lifeを余分に回復させてもらったわね」

「くっ、俺はターンエンドだ・・・」

「十代・・・貴方に見せてあげるわ!!」

突風が明日香の方から吹き始める。

「初手のカードたちは貴方の実力を測るためのモノ。ここから私の実力!!見せてあげるわ!ドロー!!」

(つづく)



第三話『速攻魔法発動!』(後書き)

最初は虫野郎から

名前を出すことすらしない

だって虫野郎だし

明日香のデッキは

氷結界もしくわりチュアか氷モンスターにしようと思う

意見があれば感想とかに書いて欲しいす

次回に期待ノシ

### 第三話『狂化した俺の魂』（前書き）

孵化+代打バッターのコンボは使えませんでした  
コンボミスしてマジサーセン！！

ミスがあれば是非言ってください！！

というわけで第三話です

### 第三話『狂化した俺の魂』

「私は手札から強欲な壺を発動し、二枚ドロ。シャドウ・リチュアを捨て、デッキから儀式魔法リチュアの儀水鏡を手札に加える！」

湖から歪な形の鏡が明日香の前に出現する

「リチュア、聞いた事ないな。明日香は儀式デッキの使い手なのか？」

湖が波を立つ。

「貴方たちは知らないわ、私も昨日知ったんだもの。そしてこれが今の私の最高の力！発動！リチュアの儀水鏡！！」

儀水鏡に映されているのは凶暴な魔物の姿。

「手札・フィールドから召喚する儀式モンスターのレベルと同じになるように生け贄を捧げる！私は場のコールド・エンカウンターとリチュア・マーカーを墓地に送り、現れなさい！！力の体現！！」

十代の前に水の力を持つ怪獣が現れた

「イビリチュア・ソウルオーガ！！」

物凄い咆哮と共に明日香の前に聳えたそれは十代たちを見下ろす

「十代！バトルよ！ソウルオーガでヴェイパーに攻撃！！ウォータ

「ブレイク!!」

ソウルオーガが水を操り、ヴェイパーを絞め上げた

「ヒーローバリアを発動!! モンスター一体の攻撃を無効にする!!」

ヴェイパーは水の拘束からなんとか逃れ、十代のフィールドに戻る

「うまく逃げたわね。でもソウルオーガはけして逃しはしない! メイン2、ソウルオーガの効果発動! 1ターンに一度手札を一枚捨てることで」

ヴェイパーがビククウェーブに流され、場から消える

「なっ!?!」

「表側のカードを手札に戻す、残念だけどヴェイパーはエクストラに戻ってもらっわ。私はターンエンドよ!」

life 4000

「くつくうー・・・強エ・・・万上目なんかとは比べ物にならないくらい、燃えてきたあ!! 俺のターンだ!! ドロー」

十代 side

「場のフォレストマンの効果!! 墓地から融合を回収し俺も強欲な壺を発動し、二枚ドロー!!! E・hero エアーマンを召喚」

十代の前に風を操るheroが颯爽と現れる

「そして俺はエアーマンの効果を使い手札にE・hero オーシヤンを加える！そして融合！圭一曰く俺の切り札？！！E・hero ジアースを特殊召喚」

現れるのは機械のようなメタルヒーロー。俺の前に降り立つ

「たかが2500のモンスターで、私の2800のソウルオーガには敵わないわよ？」

その言葉、後悔させてやるよ。heroの力はどんな悪にも負けない！！

「へえ、俺はジアースの効果でエアーマンをリリースし、攻撃力に加算する！！」

ATK2500 4300

「ジエムナイト・ルビーズと同じ効果！？」

ジ・アースが体が赤く変化する。吹き出す二本のビームサーベルを手に構える

「アース・マグナ・スラッシュ！！」

life2500

「ぐっ！！」

「明日香！楽しかったぜ！」

「えっ！？何を言っ「速攻魔法発動！！融合解除！！」

ジアースが二つに別れ、オーシャンとフォレストマンが現れる  
「まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ！！2体で明日香に直  
接攻撃！！」

life0

「きゃあああああ！！」

「ガチャ！！楽しい決闘だったぜ！！」

明日香の負け、翔が兄貴と慕う十代の姿がそこに戻っていた

圭 side

life3200

「ドロー」

フィールドはがら空き、相手は上級昆虫三体。どう考えても死ぬる

「もう諦めてサレンダーしろよ、負けは見えてるぞお？」

「面白い冗談だな・・・」

『幸運を使用しましたとさ』

場の雰囲気が変わる。虫野郎はそれに気づいていない

「俺は手札から思い出のブランク発動！！蘇れ、ガネット！そして  
ジェムレシス（2体目）を召喚！効果でジェムナイトを手札に加える！  
見せてやる、お前らの時代には無いシステムを」

「システム？なんのことだあ？」

「わからんでも良いさ・・・どうせわかる必要もない!!」

2体のモンスターでチューナーがない場合、できることは二つ、融合かエクシーズ

「2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!」

2体のモンスターが粒子とかし二人の間に渦を創る

「エクシーズ召喚!! No.39 希望皇ホープ!!」  
ATK1800

機械的な騎士が俺の前に現れる。

「え、エクシーズ召喚だと!! 聞いたこと無いし、そんな黒いカードも見たこと無いぞ!!」

「ジェムナイト・フュージョン発動!! 手札のサファイアとガネットを融合!! 全てを清める青い宝石!! ジェムナイト・アクアマリンを融合召喚!! ラストだ。団結の力をアクアマリンに装備!! ジェムナイト・フュージョンを回収しDDRを発動!! コストをフュージョン! 墓地から現れる、ジェムナイト・アレキサンド」

ATK1400 3000 2300  
DEF2600 4200 3500

「・・・所詮2300のザコじゃないか、究極の虫様は倒せないだよぉ!!」

「でもデスサイズ・キラーは倒せるぜ！ブレードアクア」

「むひよ？」

デスサイズ・キラーが破壊される。そしてアクアマリンも同士打ちで破壊される

「何をやるかと思えば同士打ちか、バカじゃないの・・・なっ！！アルテメット・インセクトLv7が俺の手札に！？」

「アクアマリンは場を離れた時にカードを一枚手札に戻す！！サイクロン発動！無視加護破壊！！」

ATK1800 2500

希望皇ホープが脇に携える剣を二本構える

「インセクト女王に攻撃！ホープ剣・スラッシュ！！そしてアレキサンドで攻撃！アレキサンドブロー」

Life1900

「ぐわあああああ！！だ、だがまだLifeはある・・・なんとか、なんとかなる！！」

「何の！！トラップカード発動！！零式魔導粉碎機・・・とアレキサンドの効果発動！！自身をリリースしてデッキからジェムナイトを特殊召喚！現れる、ガネット！！」

墓地からジェムナイトは四体

「俺のダメージは終わってないぜ！！ジェムナイト・フュージョン



の効果でアレキサンドをリリースし射出！！追加ダメージ！！フュージョンを回収し、射出！！以下省略！！」

Life 0

「ぐぎゃああああああ」

虫野郎が敗北し、カードが散らばる。

「・・・ま、負けた・・・クソクソ！！こんな思いをするのも城之内や遊戯のせいだ！！」

性格悪いなあ、オマケに人のせいにするし。でも俺がついてるんだから仕方ない

「お前がついてないんじゃない！俺がついてんだぜ！」

「クソ！クソ！くつぎゃあ！？」

「んっ！？」

虫野郎の背後にパーカーを纏うイマドキ風の誰かがそこにいる

「削除」

彼は易々と今まで敵であった虫野郎の首をへし折る

人形のようになったそれを捨て、俺に向き直る

「すまない。勝者に敗者の酷な姿はみせるものではないよね？」

『残忍だな・・・圭一感情的になるな』

「はぁ・・・はぁ、お前なんてこと、しやがる？」

嘔吐が収まるが吐き気がまだ治らない。それにあんなモノを横に放置して

『圭一！！』

「動くな、君は勝つたんだ。それで良いじゃない？」

「ふざけんなよ！！カードゲームで人が死ぬなんてこと、あつて良いんだよ・・・どんなモノでも真剣に取り組むからこそゲームは・・・楽しい・・・が君らのようなイレギュラーは色々と困るんだよ」

パーカーの誰かは右手の異形のディスクを見せる。

「次はもう少し歯応えのある者を君に送るよ」

「お前・・・何なんだよ」

「・・・知る必要はないよ」

彼はクスツと笑って、圭一に背を向けた

「では、またね」

「ま、待て・・・くっ！！」

視界が歪む。

アイツにはまだ聞きたいことがあるのに、俺の体は地に落ちた。

目が覚める。

視界には夜空が広がる。そして頭の下には美しい美脚！？

「き、キモチイイ」

「おお！！目をさましたか！？まったく、心配させてくれるな」

膝枕とかマジでこれなんてエロカードゲーム？  
じゃなくて

『どうやら君の肉体自体はなく精神的な部分が向こうに行っていたんだろっ』

気分も治ってるし、そんなバカなあゝ

「梨華さん・・・俺は？」

「まさか突然ぶっ倒れたるからかなり驚いた。」

「はあゝ、時間は？」

「時間はそんなにたっていない。一時間くらいだ」

一時間。まあそのくらいか、あの虫野郎のボコボコにしたのは

「君は体でも悪いのか？」

「いえ、今日は少し体の調子が悪いだけです！」

「そ、そうか？」

「ところで天上院の姿が見えないですが？」

「彼女なら犯人を捕まえに行っただよ」

「そうですか・・・」

こんなsituationも中々ないし、もう少しこの膝枕を堪能させてもらうか

「あんまり動かんでもらえるか、何かと恥ずかしいのでな」

頭を動かしたただけだが、梨華さんは赤面している。

だからこれなんてエロカードゲーム？

「え、ええ！できるだけ自重します」

「負けたことだし、約束通りキャラにしてあげるわ。それより犯人を見つけるの手伝いなさい」

「それは良いが、なあ明日香。圭一をしらないか？」

「我妻君なら向こうで梨華先生と一緒にいるわ」

「なんで圭一君がここにいるんすか!？」

「犯人を捕まえる手伝いよ。ホラそれより貴方たちも犯人を見つめるの手伝いなさい」

そう言つて俺と翔にライトを渡す、明日香。

「ぶくぶく・・・ま、マズイノーね・・・これでは私の教師人生が終わってしまうーノ!?かくなる上は!！」

咄嗟に湖から飛び出し、体に隠しもつ 火を使わない煙幕玉を放つ

「もちろん体にも優しいノーね」

「うわぁ!！」

「な、何なのこれは!！」

「落ち着け!煙幕だ!！」

クロノスは夜の闇へと消えていったとさ

第三話『狂化した俺の魂』（後書き）

パーカー君はガチで完全な敵です

使うデッキは考え中！！

明日香はリチュアにしました！！

氷結界はシンク口無しでも良いけど普通に強いし  
ロツクは長しで断念

ではまたノシ

第四話 『バカはテストでヘマをする』 (前書き)

遊戯王さんからの指摘で

地獄の暴走召喚はバトルフェイズ中に使えず後続にも使えないとわかったので

修正しました。

みなさん、すみません

## 第四話 『バカはテストでヘマをする』

月一テスト

そう明日はテストらしい。学園はピリピリした感じ

かく言う俺は

「うわぁあああ！！テストだとお！！どうすれば良いんだあ！！」

『何時もゲームばかりしているからこう言っことになるのだ。前の世界でもそうだったのに学習したまえ』

「くそ・・・んっ！そうだ！！教師全員闇討ちして・・・フッフフ」

部屋で対戦車用ライフルが出番を待ってる

『やめる』

何も無いところで横転する俺。神の力が

「何するんだあ」

『私〓神がいる限り不正や、違反等は許さん』

「ぐっ！！じゃあどうすればいいんだお！！」



『素直に勉強したまえ』

「べ、勉強・・・クソお！！最終手段パート2を使う時が来たか」

『パート2？』

俺は自室から走り出す。向かう先は決まっている

「梨華さん！！」

梨華の部屋は前に一度、何かあれば来ればいいと教えてもらった

「どうした、圭一君？」

何時も小綺麗にしている見た目通り部屋も綺麗だなあ

「勉強！教えてください」

――

現在死ぬ気で勉強中。梨華さんがある程度教えてくれて、そこを確  
認しながら問題を解く。

「まったく、君がまさか勉学を怠るタイプだとわね（苦笑）」

「人は誰も考えて行動しているわけではないんです」

「君は頭が良い方だからやればできるよ、普通にね」

そういつて先に進む。正直難しい。

「ちなみにデュエル理論のみだぞ」

「えっ！錬金術とかじゃないの！じゃ大抵わかるじゃん」

「そ、そうなのか！でも一応来たんだし一通りテストに出る範囲のプリントをやっつけていなさい。お茶を淹れてあげるから」

「ういゝす」

辺りを見回すとやはり綺麗だなあ、梨華さんと結婚する奴はきっとこんな部屋で二人で過ごすんだらうなあ

「こんにちわ、鮫島先生はいらっしやいますか？」

「あっ！」

「えっ？」

「どうも、小日向さん」

「なんで貴方がここににいるのかしら？」

「小日向さんこそなぜここに？」

俺が問うと星華は手に持つ資料を見せる

「ちょっと聞きたいことがあってね。」

「俺の方は勉強教えて貰おうと思ったんですが必要ないようなんで」

「ふーん」

なんか不機嫌な感じで返答したな、俺の答えでご機嫌斜めにしたのか

「ねえ、我妻君。」

「なんですか？」

「近いうちに貴方と私は戦うことになるわ。心しておきなさい」

「三年の小日向さんと一年の俺がですか？」

「ええ・・・」

その返答後、沈黙

そして梨華さんがお茶を持って戻ってくる

「んっ、どうしたのかな？小日向さん」

「実はココの意味を教えて欲しいんですが」

「ああ、ちょっと待ってくれ」

お茶を俺に渡して、彼女の方に向き直る。

数分がたち、話は終わらなそうだからお茶を頂き帰ることにした

『どうだ、なんとかかなりそうか？』

「まあな」

後日

「うわああああ！遅刻だあ！！」

「遅刻だ！遅刻！！」

二人してレッド寮を飛び出す、あのあと自分でやってて机で寝てしまったのが運のつきだ

「おお！圭ーお前も遅刻か？」

「決まってるでしょうがぁ！！はう・・・」

体力に限界が、まだモノの5分じゃないあ

「け、圭ー！そんな体力で大丈夫か？」

「はへえ・・・む、無理・・・」

終わる・・・俺の人生が・・・もの一ヶ月なのに走馬灯が見える・・・いや、・・・まだ、まだ俺はフラグを乱立させてない！！まだ死ぬるかあああああ

「・・・い、命を、燃やせ！！！！リミットオーバーアクセルシン

「クロー!!」

「うお!? け、圭一! そっちは森だぞ!!」

「壁とはぶち壊すためにあるのだあ!!」

運をフル活用して近道などを繰り返して、十代に5分差をつけ、教室にはいり、全てを書き終えた

「圭一君、どうだった?」

「・・・体が痛い」

「あつはは、来た時服ボロボロだったもんね」

「ぐうー・・・」

「それに比べて兄貴はあ」

「なんでそんなに不真面目なんだ・・・まったく」

黄色い制服を纏う男が翔のとなりで呟く

「あつ、こちら三沢君! 圭一君は会っの初めてだよね」

「はじめまして、俺の名は三沢大地。よろしく我妻圭一君」

「・・・誰?」

「?・・・三沢大地だ!」

空気君が現れた。まあまだ認識できるレベルだ

「よろしく、圭一で良いぞ」

「・・・ああ」

「そういえば、なんで皆いないの？」

「大方購買部だろう。なんでも新しいカードが大量入荷するらしいからな」

「か、カードの大量入荷!？」

どうでも良い・・・今さら使いなれてないカード入れるとかバカだろ

「三沢君は行かないの？」

「自分のデッキを信頼していればそんなカード必要ないさ」

ムックと翔の隣で寝ていた十代が起き上がる

「購買に行くぞー!翔、圭一」

「えっ？」

「はっ？」

二人を引っ張り、購買部に走る十代

着いた時にはもぬけの殻のようにその場には学生はいず、定員のみであつた

「お姉さん！新カードは？」

「沢山買っていった学生さんがいて、もうこれだけなの」

そういつて差し出された1つのパックを目の前にする三人

「俺はいらぬ、ジエムナイトでなんとかなる」

「俺も・・・いいや」

「兄貴？良いの！？筆記がダメでせめて実技はどうにかつて」

「気にすんなて」

「兄貴」

「ちよとあんた」

定員の後ろからおばさんことトメさんが現れる。このイベントは覚えてるぜ

「あつ！今朝のおばちゃん！..」

「おばちゃんじゃないわよ、トメて呼んで！トメ」

「トメさんて購買部のおばちゃんだったのか！..」

「兄貴知り合い？」

「ちょっと訳ありでな」

「今日の朝は助かったよ。あんたにはお礼しなくちゃねと思って」  
さらに1パックを出さしてくるおばさん

「今朝の車をおしてくれたお礼だよ。オシリスレッドのあんたじゃレアカードの1つもないとさ」

十代はそれを手に取り、ありがたく頂いたようだ。レアカードでサ  
ーチしたのか？

「サンキュー！トメさん」

「じゃあさっそくデッキ組に行くッス！！」

「トメさん、あのパックは？」

「ああ、古いヤツでね！売れ残りさ」

「そのパック俺が買った」

何かを感じた。なんだ？ニュータイプになったのか俺は・・・

と言う感じでそれぞれ1パックづつお買い上げした+貰った

「んじゃ、寮に買えってデッキ調整だ！！」

「はいッスー！！」



「・・・」

『気づいているな、そのカードの中に精霊がいる』

精霊を察知したのか、俺。なんかスゴい能力だな

寮にて俺は自室で開封中。

中身はまあまあ、売れ残りにしてはそれなりな内容である

「お初に御目にかかります」

眼鏡をかけ、膝をつく茶髪少女

「お前が精霊だな」

「はい。地霊使いアウスの精霊・・・名はアウスです！master  
rのお側にあるために馳せ参じました」

地霊使いか・・・ジエムナイトと一応同属性。デッキに投入して  
もいいかもな

「あ・・・」

じっくり顔を見ていたら頬を赤くした。可愛いな

「私の顔になにか？」

「・・・いや、可愛いなと」

「な、何を言ってるですかmaster!!」

「気にすんな」

「は、はあ・・・」

「霊使いの精霊か・・・他の奴等はどうした？」

「私たちは個々で違ったの能力があり、それを伸ばすため今修業中でして、みんな色々なところに散らばっています。ですから私もmasterのデッキでお使いいただきたい」

「ああ・・・わかった」

「即答ですか？」

「まあ、俺も精霊欲しかったし」

「そ、そうですね・・・」  
「ホン!! あ、ありがとございますmaster!!」

地霊使いをデッキに1枚投入し、十代たちと試験会場に向かう

デュエル会場にて十代の相手は万上目らしい。まあ、負けることはないだろ

「貴様の相手は俺のようだ!! この前のようにならんようにするん

だな、遊城十代!!」

「リベンジマッチだ!!勝つぜ、相棒」

相棒「ハネクリボーが十代の答える。可愛いな

「我妻さん!!」

下から手をふる鈴花。相手は三沢のようだ。

「・・・侮れないな」

どうやら三沢は警戒している。大丈夫、アイツはただの馬鹿だ

「鈴花を侮らない三沢君は懸命よ。彼女は・・・強いわ」

「明日香・・・どこから現れた?」

「ずっといたわ。」

「神里さんは強いスか?」

「彼女のデッキは変則的だし、なかなかの構築だと思っわ」

鈴花のデッキが戦うのを見るのは初めてだし、三沢のデッキがどの程度変化してるのか興味深々だ。

「デュエル」

「デュエル」

十代と万上目

三沢と鈴花のデュエルがそれぞれ始まった

Life 4000

「俺のターン!!」

三沢が先行か、さてなんのデッキやら

「ピラミット・タートルを召喚!!」

「アンデット・・・」

優秀なリクルーターのピラタ君を召喚か・・・

「俺はカードを二枚伏せ!エンド!!」

Life 4000

「私のターン!トランスフォームスフィアを召喚!!速攻魔法!!  
エネミーコントローラーを発動しピラタさんを守備にします」

小さな鳥人が現れ、鈴花の隣で巨大なコントローラーが相手モンス  
ターの表示形式を変更する

「さらに手札を一枚捨て!ピラタさんをスフィアに装備します!!」

スフィアが抱える球体にピラタが吸収される

「攻撃!!トランス・ウィング!!」

Life 2700

「ライフで受ける」

「効果でバトルが終わるとスフィアは守備になり、カードを一枚伏

せて！エンドで貴方のフィールドにピラタさんが守備で戻ります」

「では俺のターン！ピラタを攻撃表示にして、モンスターをセットしエンド」

三沢は慎重で何がおこるか予測して動いている

「私のターン！三沢さん！貴方のフィールドにトーチ・ゴーレムを特殊召喚し私のフィールドにトークンを2体召喚！このターン、私は通常召喚はできない」

「相手に攻撃力3000をあたえ・・・引き換えにトークン2体」

「私はトークン2体と墓地のモンスター1体を除外し！現れなさい！私と我妻さんの愛の力！！the アトモアスファイア特殊召喚！！」

あのバカは何を言ってるんだ！！ああ～視線が痛いよ

「読んでいる！悪いがそのモンスターには流れてもらおう！！畏発動！！激流葬！すべてを流し、クリッターの効果発動！！デッキからデスラクーダを手札に加える。」

上手いな・・・んっ？鈴花がなんか下向いてる。落ち込んだのか

「貴方？死ぬ覚悟はいいですか？」

「手札は0。君にできることないと思うんだが」

目がマジだ。雰囲気危ないぞ三沢

「次のドロー・・・私は天よりの宝札を引きます」

原作効果のな。六枚ドローの最強手札増強カード

「ハツタリだな・・・34枚の中の1枚を引き当てるなどではしない」

「そう思うならそう思っていればいいです。私はエンド」

なんだ？あの自信は・・・未来予知などできるはずがない

life2700

「ドロー！俺はデスクラークダをセットしターンエンド」

予知などそんな当たる確率など

life4000

「ドロー・・・」

空気が凍る。

「魔法発動・・・天よりの宝札」

一同が驚く、普通に考えて奇跡だ。

「ありえない」

「the アトモアスフィア、トーチ・ゴーレム、巨大化、メテオ  
ストライク、聖なるバリアミラーフォース、神鳥シムルグ」

六枚の予測？・・・まさか

「すべて予測通り」

「そ、そんな・・・こんなデュエル、滅茶苦茶じゃないか」

三沢の場にトーチを渡し、三沢の前に美しい愛の鳥が再臨する

「再び現れなさい・・・the アトモスファイア。効果でトーチを  
吸収」

ATK1000 4000

「さらにメテオストライクを装備し、貫通を与えます。攻撃！！悠  
久の翼」

三沢を確実に仕留めにきくる先方

life2700

「くっ！畏発動！！」チエーンしてトラップスタンを発動。この力  
ードで貴方の畏を1ターン封じます」何！？」

三沢に一撃を決めるアトモア

life4000

「私の勝ちです・・・面白味のない」

life0

「うわぁぁぁぁぁぁ」

キレた鈴花がガチで怖い

（（（（；。）。）））

それになんだあの予知能力!?

「あの子コツチ、見てますよmaster・・・?」

「えっ!?!」

マジで見てる。目が恐すぎる!俺なんにも悪いことしてないからね

「きつとthe アトモアスフィアを流されたのがよほど頭にきたのね」

こええええ!そりゃフェイバリットを流されれば怒るのわかるけど

十代side

「どつやら向こうは決着がついたようだが、万上目!」

「万上目さんだ!こちらをあきらかに貴様がふりな状況だがな」  
万上目は手札0、ドラゴンキャノンとタイガーカタパルトが存在し、  
自分には存在するモンスターはいず伏せ二枚と、手札二枚

life4000

「ドラゴンキャノンの攻撃!」

十代に向けられた砲撃が放たる

「速攻魔法!クリボーを呼ぶ笛!デッキからハネクリボーを特殊召



喚する！！」

可愛いと女子たちから声があがた。思わず俺も可愛いと言ってしまた

「毛玉野郎・・・だが続行だ！！蹴散らせ」

「はっ！甘いぜ、万上目！！」

「万上目さんだ！！」

「手札二枚をコストに進化する翼を始動！！」

ハネクリの翼が大きく広がり、鳥の兜のようなモノを付けたハネクリが現れる

「ハネクリボーはLv10へと進化。そしてハネクリボーLv10をリリースして効果！！相手フィールドの攻撃表示モンスターを全て破壊し、その攻撃力の合計を相手に与える！！」

「な、何！？」

ハネクリが極光を放ち、止んだ時には万上目Lv10はゼロになっていた。

Life0

「うわあああああああ！！」

「俺の勝ちだ！！」

実に詰まらないデュエルだなあ、原作同様

「次は圭一君だね！」

「よし！サクッと勝って今夜は祝杯するか」

「うんー！」

翔も十代のデュエルを見て燃えている。熱血だなあ

決闘場にあがると相手は今だ現れず、クロノスがしきりに時間を気にしている

「んでえ・・・俺の相手は？」

「ち、ちよと待つノーね！！」

「はあ・・・なんか緊張感がないな」

「遅れましたあゝ、すみませんえゝ」

「お、遅いノーね！！」

前髪が顔が隠れるほど長い女だった。最近は何でも女であんまり良いことないからなあゝ、俺

「桂木優奈といますうゝ、よろしくですうゝ」

「あ、ああ！我妻圭一です。よろしく」

ディスクを構える。調子狂うなあ

「では・・・デュエル開始なノーね!!」

「デュエル」

life

「私のターン・・・ドロ〜ですう、私は〜え〜・・・巨大ネズミを攻撃表示で召喚しますう〜さらにカードを一枚伏せてエンド」

地属性デッキか・・・警戒する必要があるな

life4000

「ドロ〜!ジエムナイト・ガネットを召喚!!そして攻撃」

ガネットの拳がネズミを吹っ飛ばす

life3550

「効果を使います良いですねえ〜?巨大ネズミが破壊された時にデッキからピラミット・タートルを特殊召喚しますう〜」

「・・・」

何のデッキかサツパリだ。地属にアンデット?

「俺はカードを二枚セットしエンド」

life3350

「私のターンこのターン罠を発動しますう」

初手でトラップ？サーチ系か？

「手札一枚をコストにレインボーライフを発動う〜」

「(。 。)」

なんでさつき使わねえ！？なんでだあ！？この女読めねえ！？初心者なのか！？

「あわあわ！あの〜前髪上げててもよろしいですかあ？」

「えっ、ああ！どうぞ」

カチューシャのようなモノで髪を上げる。可愛い顔してるなあこの子

「貴方・・・終わりましたよ？私の計算が正しければ」

ええ！？なんかさつきより流暢に話してるんだが、それに勝利宣言まで

「なんでそんなことわかるんだよ？」

「まあ、いいでしょう！私の計算が正しいことを御見せします！ではまず？死者蘇生で巨大ネズミ復活させここで？地獄の暴走召喚を発動します」

墓地・デッキ・手札から巨大ネズミを呼ぶ、俺はガネットを三体並べる

相手には計四体のモンスターが並ぶ・・・えっ！？まさか

「リクルータービートか・・・」

「そのとおり・・・私のデュエル理論はすべてを凌駕します！！バトル！！私は？巨大ネズミ三体で特効！！」

「くっ！！」

life4700

「して！？現れなさい、共鳴虫2体とピラミット・タートル！そして共鳴虫2体とピラミット・タートル2体で特効」

life4700 7500

lifeがすでに公式に近くなってるじゃねえか！

「？デッキからゾンビマスターとノーブルドノワールを、スカラベの大群とイナゴの軍勢を特殊召喚！！」

2体の吸血鬼と虫の大群と軍勢が出現する

「ではジェムナイト・ガネットの一体には退場いただきます」

吸血鬼が宝石戦士を砕き破壊

life3800

「くっ」

「私はメイン2で手札一枚をコストにゾンビマスターの効果でピラミットタートルを蘇生しエンドです。超回復ターン終了」

ノーブルドノワールが厄介だな、確実にリクルーターに攻撃させられるし、今の手札にはフュージョンはない

Life 3800

「ドロー・・・モンスターをセットしガネット2体を守備にしカードを一枚セットでエンドだ」

Life 7500

墓地モンスター6体

「ドロー！守備では的にもなりませんね。なら2体を反転召喚！！来なさい、スカラベ！イナゴ！」

「くっ！」

伏せていたモンスター一枚と伏せ一枚を破壊された状況が悪すぎる

「ノワールの攻撃！！美しき夜」

Life 3800

「チッ」

ガネット2が碎け、残るは1のみ

Life 7500

「ピラミットタワーでガネットに攻撃します！ゾンビマスターの攻撃！！さらにイナゴとスカラベで攻撃」

Life 400

「ぐわぁ！！くっ」

強い・・・デッキ構築がブツ飛んできるとしか言えない

「メイン2で2体を裏にし、カードをセットしエンドです」

隙が無い・・・デュエルに無駄がほとんどない

冷静になれ・・・ドローだ。必要なカードを幸運で

Life400

「、引く・・・ドロー!!」

「へえ興味深いですね」

「俺は一枚伏せ手札から天よりの宝札を発動・・・伏せ発動!闇の量産工場!」

あの子も手札補充をするがしかたない、ガネットとサファイアを回収。

「手札からジェムナイト・ガネットとサファイアを融合!!現れる、ジェムナイト・ルビース」

「いいでしょ・・・どうぞ」

「その後ガネットを除外しジェムナイト・フュージョンを回収し発動。手札にあるルマリン、サファイアを融合!!」

「黄の宝石の力!!現れる、ジェムナイト・パース!!」

トンファアを持つ黄色の宝石戦士が現れる

「フュージョンウェポンをパースに装備し!バトルだ!!ウェポン

ズ・トンファー」

ATK3300

life5400

「ノワールの効果で攻撃対象をピラミット・タートルに」

「パースの効果！倒した敵の攻撃力分のダメージを与える！！」

life4200

「くっ・・・いいでしょう！ピラタの効果で私は魂を削る死霊を特殊召喚」

「ならルビーズで殴る！！」

life3700

「カースオブヴァンパイアで受けます・・・読んでいますよ。貫通能力持ちなのでしょう？」

ルビーズが吸血鬼一体を燃やす。

「くっ・・・カードを伏せエンド」

最後に伏せたのは激流葬。カースオブヴァンパイアが戻った瞬間にすべて流してやる・・・だがこれは賭けだ。一歩間違えば負ける

life3200

「では・・・ラストターン！ドロし、スタンバイフェイスに500払い！戻りなさい、カースオブヴァンパイア」

「この瞬間に畏発動！！激流葬！！すべて流す」



「ダメです！！圭一さん！！」

墓地12体

「・・・」

鈴花が叫ぶも虚しくモンスターは流される。相手の7枚の手札の中にモンスターが無ければ俺の勝ちだ。頼むぞ・・・

「甘いです・・・私はカオスネクロマンサーを召喚します」

「攻撃力・・・3600だと・・・」

「場はがら空き・・・私の勝ちです」

カオスネクロマンサーが今まで葬られたモンスターの亡骸を糸で操る

「攻撃！！亡骸の舞い」

l i f e 0

「うわぁぁぁぁぁぁぁ」

強いだろ・・・ふざけんなよ。幸運使っても勝てないなんて

「貴方の本気見れましたよぉ〜ですが残念ですう〜またの機会を楽しみにしてますう」

いつの間にか髪型は戻っており、あとに残ったのは俺と敗北感のみ

次の日

俺は部屋に引きこもった

第四話 『バカはテストでへマをする』 (後書き)

これで良い

地獄の暴走召喚を知らなさすぎた。

勉強になりました。

ではみなさま次話で

第四話『転生と憑依』（前書き）

今回は潜入ミッションだ。

接近戦はCQCだ！！

段ボールを用意しろ

「何いつてるんだが・・・」

我妻君が呆れるようにこちらを見ていた

#### 第四話『転生と憑依』

「負けた……」

あれから数日

俺はひたすらパソコンをしている。ドアの前で女二人がそれぞれの意見が聞こえた

「圭一さん！！死んでませんか！！生きてますよね！？大丈夫ですよね!？」

「まったく一度負けたくらいで十代たちも大変らしいのに」

「……」

「圭一くん……ここ開けてよ……」

「ひぐ？しんww(棒読み)」

「鈴花、なにそれ？」

「圭一さんの部屋にある名前と同じ名前の主人公が出てくる猟奇的殺伐漫画です(しくしく)」

「鈴花ダメよ、あんまり圭一くんの影響受けちゃ」

「ひぐ？しんww」

「えっ私も！？というか、別に私は真似したわけじゃないわよ？」

鈴花 side

ここ数日、圭一さんは引きこもり生活を続けている。一番ベストな状態は私を部屋に入れて身の回りの世話をさせてもらい引き込まってもらいたいのだが部屋すら開けてくれないしまっ

「解説乙w」

「仕方ないわよ・・・優奈さんに相對した者に勝利はないわ」

「そんなに強いんですか？」

「ええ、この学校の特待生だし論文なんかでかなり賞を貰ってるし頭も良いわ。それにあの人のデツキは自分のデツキ構築論をもとにして作成しているから隙がないのよ」

「・・・よし隣 get w w」

「？」

「明日香さん！抑えて抑えて！！」

ドアに打撃が当たる音がした。犯人は明日香さんでした

「我妻 圭一決闘よ！！」

「・・・上手に焼けましたw w」

「?????!?!行くわよ、鈴花」

「あ！ちよ、ええ！私はまだここにいますから！！離してください！！」

私は首根っこ捕まれ半場無理矢理引きずられるのであった（しくしく

「桂木優奈・・・何者だ？」

『わからん・・・だがあのデッキやあの雰囲気、どこことなく君に近い存在のように感じる』

「邪魔なあいつらも帰ったことだし・・・」

現在の世界のパソを取り出し、桂木優奈の情報を検索をはじめ

『圭・・・』

「なんだ？別に落ち込んでない・・・冷却期間は終了だ。」

『いや、そうではなくて君のこのモンハーと言うゲームをやっても良いか？』

「！？あ、ああ別に良いけど」

なんだコイツ。何時もの神様じゃない・・・

『ほ、ほう！！これは自分のキャラを作れるのか・・・では名は、カミサマと』

何はまってるんだ。カミサマが別の意味で恐い

「桂木優奈・・・デツキ構築論の第一人者で若いながらも学会で有名な学者、親は存在するようだな・・・なあ、神様。俺以外の転生者とかいたりするの？」

『世界は多く存在しそれを管理する神もまたしかり、そしてその使徒たる君たちのような存在もまたまたしかりだ。君以外の転生者がいても不思議ではない・・・普通は会うことなんて滅多にないがね』

桂木優奈

転生者の可能性があるな

「ちよっくら行くか」

ササツと寮を抜け出す。ブルー寮の特殊研究室が今回の目的地

「ミッションイン・ポッシブルみたいだな、もしくはメタルギア」

『無駄口を叩くと見つかるぞ』

だが警備が赤外線とは本格的に厄介だな。

「えーと機能を一時的に麻痺させるには・・・こうしてこうして、こうやってと」

赤外線が張り巡らされた廊下が停電する

「よっ」

ササツと駆け抜けた先には部屋が待ち構えている



「わりと簡単に侵入できた」

『君にしては上出来かもしれないな』

ガチャとドアを開けた先には遊戯王カードがずらっと並んでいた

「いらつしゃい・・・」

「あれえ？・・・なんているんですか、本気モード桂木さん」

「貴方がなんとなく私の部屋に侵入しようとするなどわかって  
います。」

「へえく・・・じゃあ質問もなんとなくわかったりする？」

「私が転生者か・・・ですね？」

「・・・」

「立ち話もなんですから、紅茶でも如何ですか？」

「リプトンですか、午後茶ですか？」

「違います。自前です？」

「なんだ・・・？」

紅茶を淹れてもらったカップを啜りながら優奈を見る

「簡潔に言いますと私は憑依者です。私は桂木優奈という人に憑依し、今まで生きてきました」

「か、簡潔だな・・・じゃあ貴方は桂木優奈本人ではないと言うことか」

「否・・・桂木優奈の精神も混在しています。髪を下ろすと雰囲気が変わるでしょ？」

に、二重人格。なんてありきたりで詰まらない答えだ

「桂木優奈の中に存在する私の名は雨宮渚と言います」

「・・・ややこしいなあ」

「そうですね、それなら私のことも今後とも優奈と同じでも構いません」

「そうか・・・まあでも一応渚さんと呼ぶようにする」

そして紅茶を啜る。なんか普通だなあ二重人格とか

「・・・我妻君、答えは渡しました。貴方の行動に期待します。」

「あっ・・・はあ」

「赤外線は切っておきました。苦労しないで帰れますよ」

普通に答えを聞いた俺は帰宅する。

十代たちはいないのか・・・どっか行ったのか？

原作忘れちゃったからなあ

郵便受けを見た。中には封筒が一枚、神様はいないし封筒みてるか

「んっ・・・？」

そこには魔法カードの枠だけが書かれたカードが一枚入っていた

「誰だ・・・こんなの送る奴は」

白紙のカードを渡されてもなあ、差し出し人は不明

「お！なんか書いてある紙ハツケーン！！」

君に送る

それは世界

それは心

内に秘めし世界の具現

「意味不・・・」

カードをケースに入れた俺は次の行動を考える

「あのパーカー野郎の素性かな」

あの野郎を渚さんは知っているか、今度聞いてみよ

そうして世はふける。十代たちが帰ってきて、話を聞いたら丸藤亮と戦っていたらしい

じゃあ明日は迷宮兄弟とのバトルだな。十代と翔

頑張れよ

第四話『転生と憑依』（後書き）

渚さんでした〜

彼女は強いですよ〜

たぶん主人公には勝たさない

ではノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0430t/>

---

チートとドローを合わせれば最強に見える！！

2011年10月8日04時40分発行